HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	18 世紀半ばドイツにおける歴史学と小説 ― クラデニウス『一般歴史学』を小説理論から読むー
著者	北原，寛子；KITAHARA，Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(186)：21-36
発行日	2021-11-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

18 世紀半ばドイツにおける歴史学と小説

―― クラデニウス『一般歴史学』を小説理論から読む ――

北　原　寛　子

ドイツ語では小説は Roman であるが，この語がドイツ語圏で使用されるようになったのは 17 世紀半ばにフランス語圏から流入して以降である。「（学術語であるラテン語ではなく口語の）ロマンス語で書かれた」を意味する語が起源で，主に文芸作品を指して用いられていた。かつては「騎士道物語」「妖精物語」「王侯宮廷物語」など，作品の内容に応じてそれぞれが独立したジャンルとみなされていたが，17 世紀になるとこれらを総称する語として Roman が用いられるようになり，その用法とともにドイツ語圏へと広まっていった次第である[1]。このような経緯から，ドイツで小説 Roman は 18 世紀を通して新しいジャンルとみなされており，そのために文学理論の体系にどのように位置づけられるのかが議論されていた。当時の文学ジャンルは，神々や王侯の活動を詠うとされる叙事詩や悲劇，人間の滑稽さを強調する喜劇，田園の理想世界を詠む牧歌，社会の問題に着目した諷刺などからなっていた。現代の文学ジャンルとは趣が異なり，社会の身分・階級構造が反映されていたので，新参者としての小説は既存の体系に組み入れられるべきなのか否か，もし組み入れられるとすればどこにどのように，といった複雑な問題が見極められなければならなかった[2]。

暗中模索のような状態が続いていた 18 世紀ドイツ語圏における小説理論では，しばしば歴史 Geschichte（あるいは Historie）が引き合いに出されている[3]。例えば，スイスのプロテスタント

---

[1] Vgl. Wilhelm Voßkamp: Romantheorie in Deutschland. Von Martin Opitz bis Friedrich von Blanckenburg. Stuttgart 1973, S. 209, Anm. 10.

[2] 小説が文学理論で広く認められる定位置を獲得したのは，ヘーゲルが『美学講義』（1835）において「市民的叙事詩としての小説」と定義したことの影響が大きい。この問題については，以下 2 つの拙論で扱っている。Vgl. 北原寛子「「近代的叙事詩」としての小説　―近代小説理論の展開から読む J. K. ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』―」阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第 56 号（2015），5–27 頁。北原寛子「ディルタイのヘーゲル小説理論受容　― 19 世紀における Bildungsroman 概念展開についての一考察―」小樽商科大学編『人文研究』第 130 輯（2015），139–158 頁。

[3] 18 世紀の小説理論は近年研究テーマとして注目を集めている。Vgl. Oliver Bach u. Michael Multhammer (Hg.): Historia pragmatica. Der Roman des 18. Jahrhunderts zwischen Gelehrsamkeitsgeschichte und Autonomieästhetik. Heidelberg 2020. この論文集では副題に「学術的歴史と自律的美学の間の 18 世紀の小説」とある。しかしこれは表題として，当時の小説が位置づけられていた諸関係を象徴的に示したものであり，歴史学とのかかわりに焦点をあてたものではない。これらの研究では，当時の小説がどのように考えられていたのかや，文学大系の中で小説がどのように捉えられていたのかが論じられている。これに対して本論は，歴史学の基礎となったテクストを取り上げ，そこから文学・小説理論と比較検討しつつ考察するものである。

系聖職者ゴットハルト・ハイデッガー（1666-1711）はその著書『ミュトスコピア・ロマンティカ』(1698) において，虚構の出来事が扱われている小説を余暇の娯楽として読むことは非難すべき習慣であると主張し，小説の代わりに本当の出来事が記されている歴史に親しむことを推奨している。ここからいえることは，ハイデッガーは歴史と小説を，出来事を語るという点で似てはいるが，一方が現実の出来事を，他方が虚構の出来事を扱っているという点で対極にあり，その差ゆえに人々の余暇にふさわしい書物といかがわしい娯楽という性格の違いが生じていると考えていることである[4]。

小説を否定的にとらえていた立場からだけでなく，小説擁護派の議論でも歴史と小説は比較されている。ドイツ語による最初の本格的な小説理論書であるブランケンブルク『小説試論』(1774) では，歴史は出来事の叙述であるため無味乾燥になるとされている。小説が歴史の体裁で書かれた場合，読者の注意を引くために非現実的で突拍子がない展開をせざるを得なくなるという主張をしている。歴史は出来事の外面しか描きえないのに対し，小説は登場人物の内面を叙述することが可能であるという[5]。

19世紀を通じて，歴史と小説は別個のものであるという認識が広がった。当時の歴史家たちは，文献資料からかつてあった世界を客観的で科学的に探究できると素朴に信じていた[6]。20世紀イギリスの歴史家カーも自身のかつての研究姿勢を振り返って次のように述べている。

> […] 私がこのケンブリッジ大学で古代史を研究しておりました当時，私のテーマは「ペルシア戦役時代におけるギリシア」というのでございました。私は15冊か20冊の書物を自分の書棚に集め，私のテーマに関係のある一切の事実はこれらの書物に記録されて，この通り，私の手中にある，と考えて怪しみませんでした。[…] この史料集がかつて誰かが知っていたに相違ない無数の事実全体のうちから生き残って，これこそ歴史上の事実ということになったのは，いかなる偶然によるのか，いかなる摩滅過程によるのか，それを考えてみる気持ちも私にはまったく起こりませんでした[7]。

カーはかつての自分自身の研究姿勢を批判的に回想しているので，ここに引用した信条とはすでに決別していることがわかる。しかし20世紀前半にいたっても，歴史家は資料の無謬性を疑

---

[4] Vgl. Gotthard Heidegger: Mythoscopia Romantica oder Discours von den so benanten Romans. Faksimileausgabe nach dem Originaldruck von 1698. Hrsg. von Walter Ernst Schäfer. Berlin u. Zürich 1969, S. 70, 179 u.s.w. ハイデッガーの小説理論については，以下の拙論の考察による。北原寛子「ゴットハルト・ハイデッガーの小説批判　―17世紀末の小説論争についての一考察―」，小樽商科大学編『人文研究』第133輯（2017年3月），59-77頁。

[5] Vgl. Friedrich von Blanckenburg: Versuch über den Roman. Faksimiledruck der originalausgabe von 1774. Nachwort von Eberhard Lämmert. Stuttgart 1965, S. 264.

[6] Vgl. ジョン・ルカーチ『歴史学の将来』　村井章子訳　近藤和彦監修，みすず書房，2013年，14f.，141頁。

[7] E. H. カー『歴史とは何か』　清水幾太郎訳　岩波書店，1962年初版，2014年改版，11頁。

わず，完全かつ決定的に過去を再現できるという信念を抱いて研究に臨んでいたことがうかがえる。19 世紀の歴史学は過去の客観的で完全な再現を志向し，その点で文学ジャンルの 1 つである小説との違いは明白となった。ところがこの区別は逆に揺らぎ，歴史は小説と近しいジャンルであると主張する声が再び上がっている[8]。近年盛んになった歴史学のアイデンティティーと小説をめぐる問題についてはこれ以上立ち入らない。現在論者が取り組んでいる研究プロジェクトは，18 世紀の小説理論がどのように発展したのかを種々のテクストを分析しながら探り出すことを目指している[9]。その中で本論は，小説理論への理解を深めるために，当時の歴史理論について検討し考察するものである。

現在の日本で「歴史」は「①人類社会の過去における変遷・興亡のありさま。また，その記録。②物事の現在に至る来歴」[10] と理解されている。小説が 18 世紀には新規のジャンルであったのと同じように，当時の歴史は現在理解されている歴史とはその担うべき役割，期待された性格を異にしていた。歴史という過去の出来事を記した著作は，17 世紀には来るべき場面で王侯が適切な判断を下すために過去の事例を集積したものであり，経験を補強する行動の教科書とみなされていた[11]。行動と判断のための予行練習として，空想の歴史を書くことが家庭教師によって未来の王たちに推奨されることさえあった[12]。18 世紀初頭の歴史と現在の理解が異なるという事実は，現在にいたるどこかの時期に何らかの変化があったことを示唆している。小説理論が発展していく傍らで，歴史書や歴史学の性格も時間の経過とともに変遷し，今日ある姿が形成されていったと推測できる。小説理論と歴史はそれぞれが変化していく中で，どのように影響を与え合い，どのようにそれぞれの特徴を形成していったのだろうか。

18 世紀ドイツは，19 世紀に「誕生」する近代的な学問としての「歴史学」に大きな役割を果たした。というのも，ゲッティンゲン大学でヨハン・クリストフ・ガッテラー Johann Christoph Gatterer（1727–1799）が歴史学を講じ[13]，その流れの中から 19 世紀を代表する歴史家レオポルト・フォン・ランケ Leopold von Ranke（1795–1886）らが輩出されたからである。こうした道筋を準備するさらなる前段階で重要な著作とされているものの 1 つにクラデニウスの『一般歴史学』

---

[8] G. ルカーチは，歴史は，過去の事実にへの関心の上に成り立つが，それに向き合う歴史家の主体性やその叙述に潜む意識を含みこんだうえで成り立つという見解を示している（前掲書，166f.頁）。歴史家は実際に起こったことだけでなく，なぜ事実はそうならなかったのかという可能性についてもしっかりと考察する必要性を主張し，「将来的には，小説がすっかり歴史にのみこまれてしまうことさえあり得る」（同 133 頁）と述べている。

[9] 本論は，下記研究プロジェクトの一環であり，科研費の支援を受けている。18K00458　2018 年度基盤研究（C）18 世紀ドイツ小説理論における虚構観の変遷および内面描写の成立についての研究（研究代表者　北原寛子）

[10] 新村出編『広辞苑　第七版』 岩波書店，2018 年，3120 頁。

[11] Vgl. ヴィルヘルム・エムリッヒ『アレゴリーとしての文学　―バロック期のドイツ』 道籏泰三訳　平凡社，1993 年，S. 497ff.。

[12] 空想で描いた歴史は，もはや歴史ではなく文芸作品である。その実例はブラウンシュヴァイク公アントーン・ウルリッヒによる『アラメーナ』（1669）である。

[13] Vgl. Martin Gierl: Geschichte als präzisierte Wissenschaft. Johann Christoph Gatterer und die Historiographie des 18. Jahrhunderts im ganzen Umfang. Stuttgart–Bad Cannstatt 2012.

（1752）がある[14]。そこで本論では，『一般歴史学』を小説理論と比較して分析し，歴史は文学とどのように関わり合ったのか，そのあり方が小説理論にどのような影響を与えたのかについて考察していくことにしたい。

1．ヨハン・マルティン・クラデニウス『一般歴史学』

著者のヨハン・マルティン・クラデニウスは1710年にヴィッテンベルクで生まれた。彼の一族は多くの学者を輩出しており，父・マルティンもヴィッテンベルク大学で神学を講じていた。クラデニウスは14歳まで故郷で家庭教師から教育を受けながら過ごし，1年だけコーブルクでギムナジウムに通った。15歳でヴィッテンベルクに戻り大学に入学すると，古典文献学，哲学，神学を修めた。その後ライプツィヒで教会史を専門とする教授職に就いていた母方の親戚の元に数年暮らして研鑽を積み，またかつて通ったコーブルクのギムナジウムで教壇に立つなどし，1747年10月にエアランゲン大学で神学と修辞学・文学の教授職に就いた。そして1759年にその地で生涯を終えた[15]。1752年に発表された『一般歴史学　あらゆる種類の学識における新しい認識への基礎』[16]は彼の主著である。資料の客観的な検証を歴史学の基礎においたという点で画期的であり，1つの学術分野として歴史学が確立するために重要な礎石となったとみなされている。

『一般歴史学』はその名の通り，歴史学研究の基礎となる概念や認識，研究上の態度について論じた理論書である。具体的な事例を通してそれらを説明するというよりも，全体的に哲学書のように一般的かつ抽象的な内容を申し述べる方法をとっている。最初に取り上げる問題は，そもそも何が出来事なのか，それをどう認識し，どのように記述するべきなのかという認識と記録をめぐることがらである。クラデニウスは「世界とは把握不能な大規模なものであり，限りある制限された生き物の連なりなので，そこでは大なり小なりいたるところで絶えず変化が起こっている」（AG1）と，同時多発的に，命の限りある（＝制限された）生き物たちが入れ替わり立ち替わり活動を続けるダイナミックなこの世の展開を念頭に，歴史学が対象とすべき事象を大きく展望している。そしてその複雑な活動によりもたらされる事象とは何か，その中の何に注目すべきなのか，それらとどのように向き合うのか，という根本的な問題から説き起こしている。事象は常に変化し，これによって出来事Begebenheitが構成されるという。「世界の，その現実の中で目の前で

[14] Vgl. Wolfgang Hardtwig: Geschichtskultur und Wissenschaft. München 1990, S. 14.

[15] 当時は15歳でも家庭教師同伴が可能ならば大学で学ぶことが許されていたという。Vgl. Hans Müller: Johann Martin Chladenius（1710–1759）. Ein Beitrag zur Geschichte der Geisteswissenschaften, besonders der historischen Methodik. Berlin 1917, S. 10. また伝記については以下の資料も参考にした。Vgl. Anna Coreth: Chladni, Johann Martin. In: Neue Deutsche Biographie（NDB）. Band 3, Berlin 1957, S. 206 f.（https://daten.digitale-sammlungen.de/0001/bsb00016319/images/index.html?id=00016319&groesser=&fip=eayeayaeayaewqeayawfsdrxdsydwenxdsyd&no=3&seite=220）.

[16] Johann Martin Chladenius: Allgemeine Geschichtswissenschaft, worinn der Grund zu einer neuen Einsicht in allen Arten der Gelahrheit. Leipzig 1752. 引用に際してはAGと略記し，頁数を併記する。また日本語ではすでに用いているように『一般歴史学』と略記する。

観察される変化を出来事という」（AG2）というように出来事を定義している。そして「歴史」Geschichte を「出来事の連なりが歴史 Geschichte と呼ばれる」（AG7）と定義している。つまり彼は，歴史的な出来事そのものを指して「歴史」という語を用いているのである。彼が「歴史」という語で意図している内容は，出来事を伝えるため記述やそれについての研究も内包している今日一般の用法よりも狭く限定的で，出来事それ自体のみだという点は注意しておく必要がある。そしてクラデニウスが説くところの「歴史」を認識するということは，「今あること，起こっていることを認識することがまとめて歴史的認識と称される」（AG2）とされている。「歴史」は過去の事象のみを指すのではなく，現在進行形の世界の出来事を含んでおり，「歴史」の認識とはそれらの流れを把握しようとする積極的で主体的な活動だと規定されている。

出来事そのものである「歴史」は，単独では認識も表現もされないので，言葉の助けを借りて表現され，人々に伝達されなくてはならないという。「出来事あるいは私たちのその出来事についての判断が表現されている文を，われわれは歴史的な文と呼ぶことにしよう」（AG3）と，「歴史」を語るための文章があるとクラデニウスは説いている。「歴史」を語る言葉の中で特に大切な概念が語り Erzehlung［sic］と報告 Nachricht である。それらについては，次のように定義されている。

> 出来事の提示は，出来事そのものと区別され，歴史的な文で表現されるように，歴史と歴史についての知識は区別される。出来事が判断によって理解できるように提示されるように，そして文章によって表現されるように，ひと連なりの，あるいは大量のできごととしての歴史は，多くの判断をへて理解できるように提示され，多くの文章で表現されなくてはならない。歴史が表現される文章を語り Erzehlung という。出来事もしくはまた語りが表現されることばは総じて報告 Nachricht と呼ばれる。（AG8）

昨今の用法で歴史という語は，出来事そのものに加えてその記録も指すということは先に確認した通りである。しかしクラデニウスは，「歴史」を出来事に対してのみ用い，それを伝える叙述を「語り」，「語り」が記録としてまとまったものを「報告」と呼び区別している。「歴史」は語られなくとも存在しうるが，語るためにはその内容たる出来事＝「歴史」が存在せねばならない。「歴史」は，認識される過程で言語化されて語りとなるため，「歴史」と語りは文中の多くの箇所で「歴史と語り」というように，しばしば同時に用いられている。ドイツ語では，歴史を指す語として Geschichte と並んでしばしば Historie が用いられる。この両者の区別についてクラデニウスは「本来のギリシア語 Historie は，観察される出来事そのものと，そこから出てくる語りとしての提示も意味している。まさにこの語が，それぞれの出来事と歴史に使われていることは，多くの例から自明である。そういういうわけで，Historie という語の理解と意味はとても広いのである」（AG10）と説明しているように，Historie は出来事としての Geschichte と，その語り

Erzehlungとその集積である報告Nachrichtのすべてを内包するより広義の言葉であり，現在の我々のいうところの歴史の理解に近い。しかしこの著作においては，ほとんどHistorieという語は用いられていない。

クラデニウスの著作において，「歴史」は出来事そのものを指しているので，現在進行形の出来事を指していることもある。「歴史」を語るとは，眼前の事象を言語化し，伝達する行為なのである。だからクラデニウスは，「彼［＝出来事を傍らで見ていた人］はほかの逆行の中に，自分が見たこの変化も感じとるだろう。そうすると彼は歴史全体をそのような一般的な概念に収斂させて，いくつかの出来事を一文にして想像するだろう。その文は時間や人物，あるいは場所や必要な事柄として個人的な出来事の本当にわずかなしるしを含んでいる」（AG125）と，現在進行形の複雑な事象が，限定された言葉に的確に要約されていく過程が存在することも考察の対象に含んでいる。時間的にも空間的にもはるかに規模が大きかったはずの出来事を，その特徴を損なうことなく縮小してわずかな言葉で記録することも「歴史」をめぐる活動なのである。過去の事象を整理することや再発見することよりも，起こりつつある途上の，進行形の現象をどのように記述するのかについての問題が先に扱われており，そこから事象の認識と要約が歴史研究の担うべき重要な役割とされていることがわかる。出来事の発生から記録されるまでの過程も歴史研究に含みこんでいるので，「歴史全体から，中心の課題が取り上げられる。そうすると歴史全体が一文に要約され，それによって一般的な理解により近づくことができる」（AG134）と，事象を展望して変化の全体像を把握し，言語化することが必要だと主張している。流動的で多様な事象を包括する簡にして要を得た一文を導き出すことも歴史家の重要な活動に数えていることは，「要するに歴史記述者の偉大な技は，歴史から意義深い要約を作り出すことができるというところに成立する」（AG373）という文章に明確に表れている。

このようにして記録された過去の出来事の集積が歴史研究へとつなげられている。この記録された出来事の中から，「歴史」という出来事はまず見出されなければならない。「もしそばにいたわけでなく，報告によってでもなく，ある方法で歴史の知識に到達したとしたら，それを歴史の発見という」（AG196）と，目撃者でもなく，言葉による記録を通してでもなく，とある過去の出来事のかすかな痕跡を認識し，出来事そのものを再発見することは，「歴史」を発見することになるのだという。「だから発見するということは，たいてい，続きから歴史を引き出してくるという場合にのみ必要とされる。というのも，他の人はそんなに簡単にそこから思いついたりしないからである」（AG199）と，それまで気が付かれもせず埋もれていた重要な事象を再認識することは，多くの人には気が付くことさえできない探索困難なことがらであることも示唆されている。「ここに歴史を研究し，調査するということが成り立つのがわかるだろう」（AG201）と，「歴史」の再発見から歴史研究が始まると規定している。そして「もし私たちが保持している報告が信じられないとしたら，だから真実ではないと仮定する前に，後続研究が求められている［…］」（AG201）と，新たな検証によって「歴史」という出来事を的確に把握することが歴史研究の責務であると

説かれている。

クラデニウスは，資料に批判的に対峙する必要性を主張している。彼は「歴史」が伝承の過程で歪曲される可能性があることをつぎのように指摘している。「歴史はその内的な性質からして，特有の様式がある。あるいは少なくとも，特有の形をしている。しかしながらそれは語りの様式によって非常に変化することがある。要求された負い目で歴史をそのように変えて他の姿にしたり，あるいは他の様式にしたりする人は，歴史を歪曲している。この歪曲は，一部にはあいまいにすることによって，あるいは沈黙することによって，あるいはまた誇大化することによって起こる」（AG149）。「歴史」は伝達の過程で，出来事の正確な要約をゆがめられる危険に常にさらされており，最初に目撃して記述した人がゆがめることもあれば，本当でないことを伝えてしまう可能性もあるのだという。「歴史」を語る人が事実でない事柄を述べる理由について，それは冗談や気まぐれによるか，その本当でないことをいうことが有用だと信じているからだという（AG304）。他の人に気に入られたいという欲求が絡んでいることがある（AG305）。最初に記録する時点で生じる歪みもあれば，さらにその場にいなかった人に伝える過程で，あいまいさや誤解，誤解釈などにより内容が変質してしまうこともありうるのだという（AG172）。また人は嘘を信じがちで（AG289），間違って伝えられたことを本当のことと取り違えてしまう可能性についても指摘している。さらに語りに空想が混じることも避けるように警鐘を鳴らしている（AG311）。歴史家は，歴史的出来事にまつわる記録が本当に信じられるかどうかについて批判的な距離をおいて眺め，真実かどうかを検証する必要があるという研究の基本について指摘がなされている。

こうした検証の場合に選択すべき資料についてもクラデニウスは彼の考え方を申し述べている。「後から語ることによる語りの変化は，いずれにしろここで考慮しなくてはならない。口承の流布だけでは，聞くことやあるいはもっときちんと聞いていないこと，そしてきちんと見たか，語り手の表情などが歴史の混乱に大きな影響を与えるので，何かをはっきり言うということが困難である。ゆえに，私たちの学術的な歴史学では，もう口頭の知らせに基づく必要はなく，文字資料に取り組むことを常とするべきである」（AG177f.）と，口承よりも文字化された資料に当たる必要性を訴えている。伝承のプロセスが具体的かつ詳細にとりあげられており，口頭で伝承される際に生じる語り手の表情や聞き手の集中力や着目点までもが伝えられるべき内容に影響することが考慮されている。出来事が目撃者によって言語化しさえすれば，その内容がありのまま正しく伝播するというような抽象的な観念を排除して，実際に人から人へ伝播するときにはどのような状況で，どのようなことが起こりうるのかということまで細かく考察されている。

クラデニウスは，彼の時代にはまだ許容されていた想像した出来事を混ぜた記述を「歴史」と称することはしていない。反対に，実際に起こらなかったことをどうすれば「歴史」から極力排除できるのかという点について真剣に検討している。彼は「歴史」における本当らしさ Wahrscheinlichkeit はいかにあるべきかについては考察しているが[17]，「歴史」における Wahrheit については検討が不要だと述べている。なぜなら「歴史」は真実と同義としているからである

（AG347）。「歴史」とは出来事そのものであるとともに事実の集積であり，『一般歴史学』ではこの事実の記録を実践するために必要な認識や作業が細かく取り扱われている。

クラデニウスは，「歴史」に真実ではないことが入り込むことを避けるために，出来事の叙述で嘘がつかれる理由や，出来事の伝承経路までも考察の対象とした。そうした批判的な検討の結果として，文字資料に基づき「歴史」を記述することの重要性について繰り返し述べている。このような態度から，近代的な歴史研究の基礎を理論的に確立したとみなされることは納得できる。

2．歴史は未来を予見する―行動の教科書としての歴史研究

『一般歴史学』が現代にいたる歴史研究の基礎を築いたことに頷首する一方で，テクストには現代の理解から乖離していると思われる点もいろいろ含まれている。その一つが，「古い歴史」「新しい歴史」（AG321）と，歴史という語に時間の前後関係を表す形容詞が付いていることである。現在の我々の理解では，歴史はすべて過去に属するものなので，「古い」や「過ぎた」などの時間をさかのぼる形容が付いているとすれば違和感はない。また「遠い」や「近い」など，時間的乖離の程度を表す語も組み合わせとしてありうる。しかし先に確認したように，クラデニウスにとっての「歴史」は世界の出来事そのものであるので，同時代も含意している。その理解のなかで「古い歴史」「新しい歴史」が何を指しているのかについては確認が必要である。クラデニウス自身の説明によると，「古い歴史」とは次のようなものである。

> 何によって歴史がそもそも古くなるのか，ということが疑問である。これにはこう答えよう。もしすべての目撃者が死に絶えたとして，のちに言い伝えている人からそのことを学ばなければならなくなり，歴史についての認識の様式が変わることによってであると。[…] ではもし歴史を古いと呼ぶならば，目撃者がもう生きてはないとしたら，その歴史を最初に後から聞いた人たちが生きていないなら，さらに古いということになる。（AG353）

つまり「古い歴史」とは，時間的にさかのぼる時点の出来事を指している。先に挙げたエムリッヒの著作では，バロック時代の絵画を分析し，聖書の物語を描いているにもかかわらず画家と同時代の衣装を身につけさせていることから当時は時間的過去という認識が欠如していたという解釈を示しているが，一方でクラデニウスの歴史観には，目撃者が生きている出来事とそれを最初に伝え聞いた伝聞第一世代の人々が順に挙げられていることから，時代の経過についての感覚がはっきりと読み取れ，時間・時代の前後関係への意識が備わっていたことを認めることができる。クラデニウスは，過去の出来事を探求する際に「だから，古い歴史では，目撃者だけでなく同時

[17] 「本当らしさ Wahrscheinlichkeit とは，断定が困難な疑いの一種である」（AG331）。資料の信憑性と他との整合性をめぐって生じる状態のことで，一様ではなく，事実と誤謬の間の限りない段階が存在する（AG345）。

代の著述家も求めなければならない」（AG364）と述べているように，目撃者の一面的な視点で述べられた内容を鵜呑みにするのではなく，その出来事を別の視点から把握することに努めた記述者の叙述を参照にするのが適当であると主張している。

一方で，クラデニウスの言うところの「新しい歴史」とは何を意味するのだろうか。それは過去と認識するにはいたらない，まだ変化の途上にある一連の出来事を，つまりなおも観察が可能な進行中の出来事を指している。第五章全体が，「歴史」はどのように記述されるのか，その時代の人が出来事をどのように認識したのかというレベルから検討されているが，これは「新しい歴史」をどのように観察し，語るべきかという課題への取り組みなのである。「歴史」とはどこかで変化が起きていることであり，それ自体は目撃者がいなくても成立する。しかしそれを目撃した人が記録に残して語ると，文献資料となりのちに伝えられることになる。目撃して記録した人が出来事にどのように対峙したのか，記録者の感情や精神状態，身内・関係者・部外者といったことがらに対する距離，ことがらのどういった側面に注目して述べているのか，といった細部について詳細に検討されている。歴史資料はどのように形成されていくべきなのかということは，「新しい歴史」独自の問題である。歴史研究者本人が事象の記録を担当する可能性についても考察されており，「しかしごくまれに，歴史記述家が，自分が目撃者となった事柄をすぐさま扱っている時での，自分の知っていることからのみ語るのではなく，むしろ他の人の発言や，手に入る報告を手助けに使わなくてはならない」（AG363）と，「古い歴史」を研究する際に一つの資料に依拠するのではなく複数の信頼できる資料を，その中でも歪曲の可能性の低い文字資料を重視して検討すべきであると主張していたことと同様に，「新しい歴史」を編纂するときも多方面の資料を検討して記述する方法を推奨している。

歴史研究がいわゆる過去を対象とする「古い歴史」と，同時代史の記述活動も含む「新しい歴史」から構成されることは，現在の歴史研究の在り方からも推測が可能であるが，クラデニウスは歴史研究の未来への関連についても扱っている。

クラデニウスの主張するところによれば，歴史研究はすでに起こったことだけでなく，これから起こりうることにも密接に関連しているのだという。そのことについて，彼は下記のように説明している。

> 歴史とヒストーリエ Historie はたしかにどちらもただ起こったことや過去のことがらに使われる。なので我々の歴史的な知識の大部分を構成していることになる。しかしながら，未来のことがらは過去のことがらと，あるいは未来のことがらについての知識は過去のことがらの知識と非常に似ているのは否定できない。だから我々の精神は一方と同じように他方にも取り組むのである。未来のことは，時とともに過去に変わっていき，そして時には，未来のことを遠くまで見通すことのできない人々にとっては，まだ未来のことがらの知識は，すでに実現したことの知識と同じなのである。だからもしわれわれが今あること，起こってい

ることについて人間の知識をすっかり扱いたいならば，我々はどこまで未来のことがらに知っていることを当てはめられるのかということも観察しなくてはならない。（AG382）

17世紀の歴史観で時間の前後関係について意識が希薄だったのとは異なり，クラデニウスが順序だてて時間が経過するという意識を明白に持っているということは，先にテクストを分析して確認した通りである。しかしここに挙げた箇所では過去のことがらは未来に適用可能だと述べており，過去が未来にも繰り返すと考えているかのようにも思われる。しかし先を読み進めると，「未来へと我々の考えを通じさせる道とは，我々が未来の状態を今あることがらと，他のその場所へいたるほかものを，変化の一般的な規則から推測することである」（AG382f.）と述べているように，同じことが繰り返し起こるのではなく，似たようなことが起こりうると予測しているのであって，あくまで過去の出来事から未来はある程度推測可能だという意味で述べていることがわかる。未来を推論してその通りにはならないことはもちろんクラデニウスも十分認識している。未来のことについては，既知の状況に理論を組み合わせてたり，これまでの数値を駆使して予測したりする可能性があると言及されている（AG390）。記憶や想像力，真実一般についてもある程度規則化が可能であり（AG383），そこから十分な考察を行い，未来のことがらを予測しようとしている。しかし予測しなかったことがらも起こりうる。そこに歴史研究の限界を認めるのかとおもいきや，神の摂理が働いたことを理由にあげており（AG388），人間は起こった事象を受け入れていくしかないという見解を示している。この箇所ではクラデニウスの歴史研究への強い信頼と自負が読み取れると同時に，キリスト教の価値観と世界観の範囲内で研究を進めなくてはならなかったこの時代の思想的な状況も垣間見える。

クラデニウスは，過去が未来に単純に反復するとは考えていない。それどころか，とても現実的で合理的な範囲内で未来の予測に取り組もうとしている。それを示すわかりやすいたとえを著作の中に2つ見つけることができる。1つは夜道のたとえである。暗い夜中には遠くを見通すことができず，どこにいるのかもわからない。しかしそれでも足元だけはかろうじてうっすらと見える（AG388）。このたとえは，時間の経過は暗い夜道を進むようなものではるか先は見通すことはできないが，歴史研究は暗い夜道の中で足元をうっすらと照らす光のように，直近の状況だけでも把握することを助け，歩みを進めさせるのだと解釈することができる。もう1つは，医者のたとえである。医者は症例を集めて知識として蓄えているおかげで，症状から身体の状況を的確に把握し，経過を予測して必要な処置を施すことができる（AG389）。このたとえは，歴史研究は病気の症例を集めるように過去の事例を収集し，出来事がその先にどうなるかを予測することが可能なのだということを意味している。クラデニウスの考える未来の予想というのは，未来の世界についての全般的で広範囲のあり方にかかわるのではなく，患者の身体のように個別の事例に限定された範囲を対象としているのである。

バロック時代に歴史書が行動の教科書とされたのは，過去のことが未来に反復されることを期

待していたので，そのために過去がどうあったのかを知ることはいつかの将来にとるべき行動の模範となるとされていたためである。つまり出来事が反復するという歴史観が反映した結果であるといえる。クラデニウスの時間感覚はそれ以前とは異なっているが，彼の歴史研究への態度が，バロック時代のそれとはまったく異質かといえばそうではない。行動の教科書という歴史の目的を，クラデニウスもしっかりと継承している。むしろ彼の歴史研究への対峙の根底には，「行動の教科書としての歴史書」という価値観がしっかりと根付いている。それは「しかし歴史記述者たちの本は，偶然にも過去の歴史から成立した教科書なのである。[…] だから私たちは歴史記述者を，広範にかつ長期間，偉大な出来事について世界に教えようとする教師とみなさねばならない」（AG361）と述べていることからも明らかに読み取ることができる。クラデニウスにとって歴史研究の根本的な目的が人々への教示 Belehrung であったことはテクストの多くの箇所から垣間見ることができる。第十一章に「記述者本人はその場にいなくとも，目撃者の歴史を見聞できるようにしたと私たちが確信できることだけで，同時代の記述者の名声が大きいのではない。その記述者が彼の語りと教示 Belehrung をそのような時代に明るみに出したことにもよるのである […]」（AG364）という記述があるのはその一例である。しかし歴史記述者の視点やその記述に与える気分の影響などについては独自の節が設けられて論じられているにもかかわらず，歴史の教示 Belehrung にかかわる問題についてはテクスト全体で言及されているものの，個別の節が設けられていない。この事実から，クラデニウスにとっては歴史書が行動の教科書であることが自明のことであったので，あえて特別に言及する必要を感じていなかったことがつよく推測される。歴史書が人々の教示に資するものであるからこそ，過去の事例を集積したり，現在の出来事を記録したりする行為に価値が生じるのであり，未来の予測にかかわるのである。歴史研究が信頼すべき資料に依拠して記述されるべきことよりも，多方面の資料を比較検討して出来事の実像に迫ろうとすることよりも，資料から虚構や誤りを排除することよりも，人々に過去の事例を通して教示することのほうが当時の人々にとっては自明であり，新たに知らせる必要がなかったのである。時代の共通した価値観であったため，クラデニウスがわざわざ特別に説明することもなかったといえる。

3．歴史学と小説理論

クラデニウスがエアランゲン大学で講じていたのは，先に説明したように神学・修辞学・文学である。なぜ文学や修辞学を担当する教授が歴史研究の理論書を執筆しなければならなかったのだろうか。それは 18 世紀ドイツでは，歴史研究は文学・修辞学の中に含まれていたからである。ではなぜ，過去の出来事に弁論術が関連するのだろうか。それは「歴史」を伝えるための語りの技術が重視されていたからである。その点について，クラデニウスは次のように書き残している。

日々の経験の教えるところによると，歴史は未熟で面白くないようにも，反対に心地よく楽

しくも披露されうるものである。つまり，心地よさと悪さは歴史の特性や成果なのではなく，語りのそれなのである。しかしどうして一方が雄弁さに属し，他方が雄弁とは対極にある間違いに属しているかということは，すべてが歴史と語りの真実を目指す本論においては，扱うことができない。しかし弁論術にとっては，これは主要な課題である。なぜなら，楽しみに奉仕すべきすべての弁論でも，政治的な弁論にとってはなおさら，ことがらを損なわず，好印象の特性を備えるべきだからであり，まさに起伏のある語りがつながっていくことそのものだからである。（AG153f.）

クラデニウス自身がここで述べているように，弁論術は本来「歴史」という出来事そのものの本質にはかかわることではない。しかし出来事を順序だてて話し，聞く人・読む人が喜んで受け入れてくれるようにするためには，語りの技術がかかわってくるのである。「歴史」にまとめられたさまざまな過程を含む事象は，語られることでようやく人に認識され伝達されることになる。そもそも，１つの「歴史」にまとめられる一連の出来事では，同じ時期に複数の場所でそれぞれの変化が発生していることが往々にしてある。「歴史」を語るためには，それらを整理し，語る内容をまとめ上げなくてはならない。弁論術・修辞学は事象を言語的に表現する技術であるので，「歴史」をいかに記述するのかを弁論術の課題として取り上げることは，専門の性格から判断して妥当であるといえる。当時の歴史研究は，出来事本体への批判的な取り組みはようやくクラデニウスが『一般歴史学』で取り上げて注目されるようになった段階であり，「歴史」を再話するための手段である語りが重要なウエイトを占めていたのである[18]。

当時の歴史研究は，語りの順序や方法が重視されたことも，描写の対象となる出来事の選択という点でも，文学と共通する項目が多かった。クラデニウスも，『一般歴史学』全体からするとごくわずかであるが，「歴史」と文学の関連について言及している。そのうちもっとも重要なのは下記の箇所である。

先行することから続きを導き出したり，推測したりすることができなければできないほど，そのような歴史は注目すべきものに思われる。我々の祖先は，これをお話し Mähren［sic］と呼んだ。しかしこの語は次第に寓話 Fabel という同じ意味の語へと，つまり後味を引く寓話という同義語へとなっていった。そのような語りの時には，時と場所に特に注意が払われるということはなかった。なぜなら，これらはここで引き合いに出された場合では歴史にあまり寄与しないからである。つながりがきれいな歴史は，いつでもそのまま残り，望むだけ語られるだろう。そのように並外れた歴史に人工的な寓話が起源をもっているということに

[18] 20世紀後半以降の歴史家たちも再び歴史における語りに着目することになる。ただし，語りを抽象的な技術としてとらえていた18世紀とは異なり，それを実行する歴史家本人の潜在的で個別的な意識が大きく作用していることに大きな関心を寄せることになる。Vgl. ルカーチ，前掲書，第四章「文学としての歴史の再認識」。

ついては，疑いの余地はないだろう。というのも，本当に存在したよりも多くの出来事の結びつきがたしかに可能だからである。つまり本当の歴史よりも，ときどき語られるそのまったく推測しなかったつながりという点できっと優れていたであろうそのような出来事の結びつきが楽しみのために考え出されたのだ。（AG276f.）

「お話し」Mähren（現代ドイツ語では Mär）は，縮小語尾-chen が付いたメルヒェン Märchen という形で広範に用いられている語である。クラデニウスは，創作された話の起源は，驚くべき展開をする「歴史」にあるという説を表明している。素晴らしい経過をたどった事実というのは，脚色を加えなくてもそのまま「歴史」として人々の間に残るものであるが，一方でこうあればよかったのに，こうあることもできたかもしれない，という潜在的な可能性としての「歴史」が創作された物語へと展開していったとしている。クラデニウスが使用している用語の中で目を引くのが寓話 Fabel である。この語は，18 世紀半ばの規範的な詩学であったゴットシェートの『文学批判試論　第四版』（1751）において，文学の形式の中で最も重要とされている[19]。寓話はイソップ物語を典型としている。それは「教えつつ楽しませる」という文学に求められる役割がこの作品の核心にあり，読者を教育するという意図が明白だからである。このようにゴットシェートの詩論を鑑みると，クラデニウスが寓話を文学の形式として第一に挙げていることは，時代の状況からして標準的な説を唱えているとみなすことができる[20]。ゴットシェートが各種の文学ジャンルを寓話の変形ととらえたように，クラデニウスは「寓話の優れた様式」と題された第八章第五十四節において，寓話の中でも幸せな結末を迎えるものを喜劇，不幸に終わるものを悲劇としている（AG278）[21]。

一方で，『一般歴史学』では小説 Roman への言及は皆無である。それは先に指摘したように，小説が文学理論においてどのように位置づけられるべきかさえも定まっていない状況が影響していると考えられる。そこで『一般歴史学』の中に小説的なるものを探り出そうとする方法とは反対に，ドイツで最初の本格的な小説理論書であるブランケンブルクの『小説試論』のなかから『一般歴史学』の内容と関連してとりあげるべき項目 2 点をあげることにしたい。第一は語りの手がどのような立場にあるのかという点について，第二は人物の内面の描写についてである。

最初の語りの主体というテーマについて，『一般歴史学』第二章で「歴史」という出来事を観察

19　ゴットシェートの詩学については，以下の拙論で扱っている。Vgl. 北原寛子「18 世紀ドイツ小説理論についての一考察　ゴットシェート『文学批判試論』を手がかりに」小樽商科大学言語センター編『言語センター広報 Language Studies』第 21 号（2013），21-29 頁。

20　クラデニウスは 1742 年ごろからライプツィヒ大学で教会史についての教職についており，ゴットシェートと個人的な面識があったといわれている。Vgl. H. Müller, a. a. O., S. 18.

21　文学のジャンルを寓話の変形とみなす点でも，クラデニウスは基本的にゴットシェートの詩学に則っているといえる。しかし，ゴットシェートの各ジャンルの発展についての考察は，クラデニウスと比較するとはるかに複雑である。

する人の身体的な諸条件が考察されている。出来事はいつでもどれでも多面的で，どの角度から観察するかという視点が問題となることや，またその観察者が出来事にどのような形でかかわっているのかということも知りえた内容に関わってくるとして細かい分析がなされている。これらの議論からわかることは，クラデニウスは「歴史」の記録をするのが１人の人間であるということを明確に意識していたということである。ただの抽象的な人間を仮定するのではなく，「しかしそれに対して，歴史記述者は，宗教も祖国も家族もない人のように活動すべきだと主張する人たちは，非常に思い違いをしている。しかしこれは，歴史 Geschichte と語り Erzehlung の違いに気が付かなかったために起こったことである。歴史においては目撃者の立場が関係しないように，語りにおいてもそれが関係ないとしたのである。みずからの視点から離れてまったく抽象的に語ることは，第四・五章で述べたのように不可能である」（AG151）と述べているように，記述者の社会的な立場まで含みこんだうえで語りを考察すべきであるとしている。出来事の変化をもたらして「歴史」の原動力となるのが人間ならば，それを記録し，語るのも人間，伝えるのも人間ということをしっかりと意識している。そのうえで人間が犯しがちな誤謬を最初から考慮して，それらを排除するための手順まで歴史研究に組み込もうとしている。その点で彼の示す研究態度は現実的で合理的といえる。

記述者の人間性を考慮する歴史研究に対して，ブランケンブルクは小説家に次のように求めている。

> 詩人は，不名誉を被りたくなければ，自分の人物たちの内面を知らないという非難を受けることはできない。詩人は彼らの創造主なのである。彼らはその全特性，全存在を詩人によって保たれている。彼らは詩人が整えた世界に生きているのだ[22]。

ブランケンブルクが理想とした小説家の立ち位置は，創造主のそれである。自分自身が創造した世界の中で，人間的な知覚の限界とは全く無縁に，神の立場からすべてを見通して記述することを求めている。詩人は作品のなかで万能の存在として君臨しつつ，登場人物たちを自在に操ることができるはずだし，またそうしなければならないのだと主張している。ブランケンブルクが小説家に求めた記述者としての役割は，人間の限界を超越して神に至ることである。これはクラデニウスが歴史を語るには人間の限界を考慮して理論を形成しなければならなかったこととは対極にあるといえる。現実の出来事を再構成する歴史書においては，どれだけの資料を集めても決して完全な描写に到達することはできないという限界も同時に内包されているのであるが，クラデニウスが理論を打ち出した段階では，その限界は意識されず，ただその方法をひたすら目指すだけであった。そういうわけでクラデニウスの考え方は現実的であり，事実と真実に対して謙虚

[22] Fr. v. Blanckenburg, a. a. O., S 264f.

な態度を示している。先に紹介した 20 世紀の歴史研究者カーの反省的回想では，15 冊か 20 冊の著作で古代の出来事を再現できると信じることができたという。カーの述懐から，歴史研究者たちが 19 世紀を通じて文字資料の批判的検証が人間の限界を超える完璧な手法であるという自負にいたったことが垣間見える。歴史研究が歴史記述者の在り方を世紀が移り変わるにつれて生身の人間から抽象的かつ完璧な存在へとラディカルに転換させた一方で，小説にはそれとは真逆の変化が起こっていた。つまり 18 世紀後半には，作者が神の視点を志向していながら，19 世紀には創作する個人としての作者の人格が作品と違和感なく結びつけられて受け入れられるようになったのである。クラデニウスとブランケンブルクが歴史理論と小説理論で書き手の立場を正反対に，一方では人間らしさを，他方では人間を超越する創造主を志向したのに対して，19 世紀ではその受け止められ方が正反対に変わっていったのである。歴史と小説は，常に相手とは反対の立場になることによって互いの違いを際立たせているかのようである。常に対極に位置し，お互いが対立しあうことで補完しつつ共存しているのである。

第二の人物の内面描写にかかわる点でも，歴史書と小説は相互対立・相互補完の関係にあるといえる。クラデニウスは歴史が人間の心の中を扱うことについて，「人間の心の変化は，特に意志の変化は，そこから人間の決心，行動，影響や業績が成立するので，とても重要であるにもかからず，人間のうちのただの思考やただの願望は考察されないのが常である。これは特に，他人があずかり知らないためである。だからそれらはヒストーリエ Historie でも評価することができない」（AG59）と述べている。「歴史」は目に見える変化の集積なので，それが行動に表れて周りに影響を与えないのであれば観察の対象となりえない。心の中は他人が覗き見ることができないので，「歴史」の記述に人物の感情や思考を含めることは不可能なのである。それに対して小説は，先に引用した『小説試論』の箇所にもあったように，詩人が登場人物の内面を語ることこそが重要とされていた。小説は「歴史」と異なり現実の事象を記述するわけではないので，人の心の中という推測によってしか図ることのできない内容であっても自由に盛り込むことが可能なのである。

4．ま　と　め

ブランケンブルクが登場人物の内面を描写することを求めたのは，それによって登場人物の行為を合理的に説明するためである。ブランケンブルクは，きっかけとなる事柄がどのように登場人物たちの心に作用し，行動につながっていったのかを分かりやすく提示することが小説の役割であり，特徴であると主張している[23]。「詩人は，読者たちの中に，彼のやり方でうまくいく方法

[23] 『一般歴史学』と『小説試論』の語彙的な共通点について若干指摘しておきたい。この 2 つの著作はおよそ 20 年の差はあるとはいえ，ともに 18 世紀半ばに出版されている。比較的近い時代の作品であるせいか，ブランケンブルクの著作にも出来事 Begebenheit という語が多用されるなど，一部の用語に類似がある。ブランケンブルクは小説に「原因の影響」Wirkung einer Ursache を明確に記述することを繰り返し求めているが，これは小

で，人間の完全性と使命を促進する想像と感情を作り出さなくてはならない」[24]と述べているように，小説が作品を通じて読者の人間的な成長に資するものでなければならないと繰り返し訴えている。クラデニウスが『一般歴史学』の中で歴史書に教育へと資すること求めていたことは，先に確認した通りである。18世紀のドイツでは，芸術・文化・学問などのあらゆる分野の活動が，人々の人格的成長に貢献し，賢明な判断の助けとなることに活動の意義を見出していた。人間はみずからの努力によって能力を向上させられる，自分自身を成長させることができるという認識が人々の間に芽生えたためであり，理想を追い求めることで精神を豊かにし，ひいては世界をより素晴らしくできるという期待をいろいろな局面で語り合っていた。新たな理論を打ち出そうとしていた歴史研究においても，文学ジャンル界の新参者である小説にとっても，事情は共通しており，従うべき価値観も同じだった。両者はともに人々の向上に貢献することを至上の目的としつつ，それぞれの形式を確立しようとしていた。クラデニウスの『一般歴史学』を当時の小説理論と一緒に検討することで明らかになったことは，歴史と小説が，現実と虚構，人間の視点と神の視点，起こったこととありえたはずのこと，人物の内面を扱う，扱わないなど，多くの比較可能な要素をもち対照的であるとともに，正反対ながら互いに相似しているという事実である。クラデニウスが提示した18世紀半ばの歴史理論は，行動の教科書としての歴史，教養としての歴史という特徴をしっかりと保持していた。この要素はその後小説理論でビルドゥンクスロマンBildungsromanの形成にも影響を与えたと予想できる。また一方で学問分野として独り立ちすることに成功した歴史研究からは否定されることにもなる。その変化は小説理論の進展とどのように照らし合わせていけるのか，そもそもそのような比較が可能なのかという点から検討が必要である。今後の課題は，18–19世紀の他の歴史研究が小説理論に与えた影響について考察することである。

説の論理性と合理性を希求するという点でひときわ重要な概念である。翻って『一般歴史学』においては，「出来事の原因」Ursache einer Begebenheit（AG208 u. s. w.）という表現がたびたび用いられている。

[24] Fr. v. Blanckenburg, a. a. O., S. 252.